

ウルトラマラソン大会では、通常のフルマラソン以上に主催者は安全管理に気をつける必要がある。秋田県医師会では、1989年から毎年開催されている北緯40°秋田内陸リゾートカップ100キロチャレンジマラソン（秋田県角館～鷹巣）の医療救護班として、医師・看護師を派遣している。年々参加者が増え、最近では1,700人前後で推移している。主催者の医療班として100km走が身体にどのような影響を及ぼすのか、また安全に走りきるためにスポーツ医学的立場から生化学検査を行った。参加者中23名のボランティアから採血させていただきその検査結果を公表し検証を行った。その結果を秋田県医学会、青森県スポーツ医学研究会、日本臨床スポーツ医学会で発表し、「臨床スポーツ医学」第13巻第1号（平成8年1月）に投稿し掲載された。生化学検査ではCPK、Mbの上昇が顕著で、スタート前に比しゴール後はそれぞれ約40倍、約130倍の上昇であった。レース中筋肉痛～筋肉けいれんを起こした症例は多く見られたが、横紋筋融解症による腎不全例は見られなかった。トレーニング量と当日の水分補給の差が安全に走るためのポイントと考えられた。

このような結果をふまえ、その後の大会参加者には医療班スポーツドクターからのアドバイスとして、十分なトレーニングを積んで参加すること、当日レース中は十二分な水分と栄養補給を心がけ、体調不良の際は勇気ある撤退が大切であることを伝え、安全のための自己管理の大切さを啓蒙した。

秋田県医師会では、毎回大会には医療救護班として医師、看護師を参加させ、応援いただいている自衛隊救護部隊と連携し救護にあたっている。今後は秋田県スポーツ医学研究会も会として後援し、ランニングドクターを参加させ、有事には医療班としての役割を担いながらサポートする予定である。さらに選手として参加していないドクターには救護医療班として応援する体制を固めている。AEDが普及してからは、コース内の大会監視車両やドクターカーにAEDを搭載し循環しながらサポートしている。第21回大会（2011年）ではレース中心肺停止例が発生したが、AED使用で蘇生でき救命された。近年参加者の中にいる医師、看護師の方々には、事前に医療救護班として登録し、有事に協力いただける体制をとり安全管理面を強化している。過酷なウルトラマラソンであるが、ランナーの安全を守り、レース中一人の死者も出さないのをモットーに大会をサポートしている。